

曲目解説

Anime alla Derive (彷徨える霊)

Ugo Bottacchiari (ウゴ・ボッタキアリ) 作曲

中野 二郎 編曲

作者は 1879 年 3 月 10 日イタリア・マチェラータのカステルライモンドに生まれ、1944 年逝ったイタリアの作曲家。郷土に近いペザロのロッシーニ音楽院でマスカーニの教えを受け、卒業後作曲活動に専念し、数度の作曲コンクールに入賞して金牌を受けた。オーケストラ曲、吹奏楽曲、室内楽曲、声楽曲、があるが、中でもジェノバ市に捧げられた四楽章の交響樂はもっとも有名である。名声を高めたのはオペラ「影」で 1899 年郷土マチェラータのロッシ劇場に於いて初演され大成功を収めたと言う。マンドリン関係では本邦では「交響的前奏曲」で親しまれている作者であるが、出版社がポーニアのコメルリーニ出版社である為他の作品があまり日本には入っていない。しかし、前述の「交響的前奏曲」はマンドリン合奏に携わる者が、皆その魅力にとりつかれている名曲である。

作者の晩年に当る 1941 年シェナで行われたマンドリン楽作曲コンクールに最高入賞した「夢の魅惑」もマンドリン樂の珠玉であるが、作者は遂にその出版を見ずに逝ってしまったのである。亡霊を扱った歌劇「影」、その他にも「イル・ポート(誓い)」、「夢！うつつ！」等、夢幻的な着想のものが多いのは、マンドリン樂が抱懐するロマンティズムを披瀝するには最も格好なものであったからに違いない。本曲「彷徨える霊」の原曲は管弦樂である。宗教的意味合い(鎮魂歌)を込めてなのか、比喩的な標題音楽なのか、作曲背景は定かではない。マンドチェロによる冒頭の旋律は和声の微妙な変化をつけながら、マンドリンに受け継がれて行く。不安、焦燥、優しさ、など様々な情景を見せ Grandioso に向かって各声部は交錯した和声を展開し、最高潮に達する。高揚するロマンの薫りは、かの「イル・ポート」や「交響的前奏曲」の手法にそっくりである。やがて最強音是最弱音へと移り静かに閉じる。総譜には interlude とあるようにわずか 92 小節の「間奏曲」であるが、短い中にも一つのドラマがあり、潮がひく様に静まっていった後の沈黙は何とも言えないものがある。

1977 年 8 月 5 日同志社大学マンドリンクラブ長野演奏会(長野県篠ノ井市民会館)にて本邦初演。

Suite Goliardica (組曲 中世の放浪学生)

Amedeo Amadei(アメデオ・アマデイ) 作曲

中野 二郎 編曲

作者は 1866 年 12 月 9 日イタリアのロレートに生まれ、1935 年 6 月 16 日トリノーに逝った作曲家で管弦樂指揮者。父ロベルトに学びその後ポーニアのアカデミア・フィラルモニカを卒業、オルガニスト兼合唱指揮者として活躍したが、1889 年歩兵第 73 連隊長を拜命以来、各地軍樂隊長を歴任して、退役後はトリノーに安住し、指揮者、教授として音楽界各方面に尽くした。作品もオペレッタ、管弦樂曲、吹奏樂曲、歌曲、ピアノ曲、室内樂曲、マンドリン合奏曲を含めて約五百曲がある。本曲を(原曲は管弦樂)を編曲した中野二郎氏は下記の様に述べている。

「1935 年 6 月イルプレットロ誌のアマディ訃報の中にも又著名な音楽辞典にも記されているのは、本曲が器樂曲として代表的作品であるという事である。主要作品はやはりオペラにあるようであるが、組曲が七つ八つあり、うちマンドリンの「海の組曲」以外は管弦樂曲である。筆者は永年之の出版譜を探し求めていたが判明せず、同志社大学 OB 指揮者岡村君が以前渡伊して Amadei の娘を訪ねて、之の機縁で楽譜を入手することが出来た記念すべき作品である。既にひと通り組曲の類を発表したので之が最後になった。

第一楽章「Ronda」は放浪より巡遊が適切で中世では大学に在学中に実際の経験を積む意味に各地を旅したものらしい。

第二楽章「愛のワルツ」作者は第二楽章にワルツを置くのが好きのようであるがこの楽章は演奏が難しい。

第三楽章「マッティナータ」は朝のセレナータとも云うべきもので清々しさを身上とするが之又表現が難しい。

第四楽章「謝肉祭の行列」終曲に適切な賑々しさであるが、之らはいずれも巡遊中に遭遇した云わば旅日記とでも云うべきものであろう。」

1977年3月28日同志社大学マンドリンクラブ広島演奏会(広島青少年センターホール)にて本邦初演。

◆◆◆◆ ちょっとお洒落なイタリアの香り ◆◆◆◆

Arrivederci, Roma (アリベデルチ・ローマ)

R.Rascel 作曲

「夕闇しのびよる石畳のうえに、長い影をおとして佇む一人の私、古い都ローマの泉にいつか又帰り来る日の来らんことを、いつか又めぐり来る日の幸せを祈る、 アリベデルチ ローマ さようなら ローマ 」

ガリネイー・ジョバンニーニの詩にレナート・ラッセルが作曲したビギン調の軽快な作品。

アリベデルチ・ローマ(さよならローマ)は今やイタリア全土で広く歌われているカンツォーネである。

Core 'nGrato (Catari) (カタリ)

S.Cardillo 作曲

「カタリ カタリ 君故にわが心泣き わが胸痛み苦しむ されど その名カタリ

何故に かくも愛しくひびく我心 カタリ カタリ と叫ぶ 君故に 捧げつくせし我心の カタリ カタリ

何故に 君はかくも冷たい 我心の 淋しさを君や知らずや 君故の 恋の辛さを 切なさを

知らずや 情なき君 生きるすべなき我を 空蟬の世を いかにも生くべき 」

この切ない恋心を、冷たい乙女に訴えるカンツォーネはリカルド・コルティフェロの詩に、1911年サルバドール・カルティロが作曲したもので、ジュゼッペ・ディ・ステファニーノの歌で一躍有名になった。

Santa Lucia Fantasia (サンタルチア幻想曲)

C.Graziani-Walter 作曲

「白い月影、静かなる波 風によって わが小船は滑るようにゆく 爽やかな西風が頬をなでる

旅人よ この小船に乗りなさい 夢のような ナポリ 天から授かった この地 調和の国 ナポリ」

サンタルチア(聖ルチア)はイタリアのシチリア島生まれの女性聖者で、貧しい人々に財産の全てを提供した純粋な人と言われている。貧民の生活に一筋の光を与えた彼女は光の聖人として、又農耕の守護神として親しまれており、光の明るさを表すルクスという単位は彼女の名前に由来しているとか。サンタルチアを繰り返す守護神賛歌はエンリコ・コソヴィチ 1850年の作詞で、これにオドロ・コットウラが作曲したものである。オーソレミオ(私の太陽)とともにイタリア民謡の双璧といわれ、世界の到る処で口ずさまれている。

Italia 〈Marcia Eroica〉 (イタリア〜英雄行進曲)

Amedeo Amadei 作曲

作品番号 326 の「英雄行進曲」と副題されるこの曲は、非常に明朗でかつ堂々とした作品である。形式的に見れば複合三部形式とみることができ、一貫性の主題のリズムは trio にも表れ、レガートに奏されるギターの和音が効果的で、威厳のある英雄を思わせる曲である。福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルとしては、第 23 回定期演奏会(1989.11.23)以来の再演である。

マンドリンオーケストラの為の舞踊風組曲第 1 番

久保田 孝 作曲

本曲は作者がドイツ・オーストリアヘブプロの音楽家を目指して留学された時期に、作曲課題等のスケッチをもとに 1972 年 3 月に完成した 14 番目の作品である。従来の古典的な作風に比べ新しい息吹が感じられ、組曲形式を保ちながらも、現代的なものを随所に取り入れている。冒頭における不協和音、中間部のテンポルバートと和音の層の変化、後半の 5/8 拍子を中心とした変拍子などで、これらを有効に用いたこの作品は、その音楽性を非常に高いものとしている。曲は序奏と 4 つの舞曲と 3 つの経過句から成り立っており、後半、変拍子の中心モチーフの繰り返しによってこの舞曲は終結する。この曲はまぎれもなく氏の傑作であり、氏の作品群の中でも異彩を放っている。帰国後、NHK 青少年音楽祭(JMJ)のジュネス・ミュージカル・マンドリンオーケストラのコンサートで自ら指揮して(1976 年 7 月 5 日、新宿厚生年金会館大ホール、第 1 部慶応ブロックのステージ)人気を博し、その後 1980 年関東地区の各大学のコンサートを中心に頻繁に演奏されるようになった。作者は 1942 年 7 月 12 日、東京で生まれる。1965 年、三石精一氏に指揮法を師事。1968 年渡欧してアルテュール・グリューバー氏、ハンス・スワロフスキー氏に師事、1974 年ウイーン音楽大学を卒業後、帰国して札幌交響楽団、群馬交響楽団等、幾つかの交響楽団を指揮した。マンドリン界では、1976 年以来 7 年間、青少年音楽祭でジュネス・ミュージカル・マンドリン・オーケストラの指揮を務める。帰国直後 KMA (Kubota Musik Akademie) を創設し、後進の指導にあたっている。又、93 年度より KUBOTA Philomandolinen Orchester を主宰、演奏活動にも力を注いでいる。現在、日本音楽著作権協会正会員、日本作曲家協会会員、日本マンドリン連盟顧問。

マンドリンオーケストラの為のグランドシャコンヌ

藤掛 廣幸 作曲

本曲は神戸大学マンドリンクラブの東京演奏会(1981 年 4 月 4 日浅草公会堂)にて初演された。作者は初演に当って下記のようなコメントを述べている。「“シャコンヌ”とはバロック音楽形式の一つで、一つのテーマが次々と変奏されていく変奏曲形式である。この曲は、中世の教会調旋法的なハーモニーによる 8 小節のテーマをもとに、次々と変奏されて、全体が一つの曲を形作るという方法によって作曲されている。このテーマの和声の進行は作曲者として、とても気に入っているもので、スムーズに仕事を進める事ができた。」作者は現代日本の音楽を語る上で欠くことのできない代表的作曲家であり、1977 年ベルギーで開催された「エリーザベト王妃国際音楽コンクール」において、大編成の管弦楽『縄文譜』で日本人初のグランプリに輝いたのはつとに有名であるが、他にも毎日音楽コンクール入賞、全日本吹奏楽コンクール課題曲作曲賞、日本マンドリン連盟合奏曲コンクール入賞、笹川賞吹奏楽作曲コンクール 2 年連続第 1 席受賞、音楽の友社作曲コンクール入賞、民放連盟最優秀賞等数えきれない受賞を持っている。1949 年岐阜県生まれ。愛知県立芸術大学作曲科卒業、同大学院修了。日本作曲家協議会会員、日本マンドリン連盟顧問。

パスタのお話

イタリア生まれのスパゲッティは世界各国で愛され、子供から大人まで幅広い方に食される料理です。スパゲッティは、「デュラム小麦」という黄色の色素を持つ小麦を特殊な製粉機で粗くひいた「デュラムセモリナ粉」を水で練り、細い麺状にした食べ物で、イタリアでは「粉と水を練ったもの」を「パスタ」と呼びます。このパスタはまさしくイタリアでの「麺の総称」で、このうち「ロングパスタ（長い麺）」がスパゲッティなのです。パスタの命は、シコッとした独特の食感ですが、このコシの強さは「デュラムセモリナ粉」独特のもの。本場のイタリアではパスタにデュラムセモリナ粉を100%使用することを法律で決めているほどです。デュラム小麦は、アメリカやカナダでも収穫されますが、やはりもっとも質がよいとされるのは、本場イタリアの穀倉地帯で収穫されたもの。そしてイタリアの地方に昔から伝わる最良の製粉技術は、「さすが本場」と世界じゅうが認めるところです。「アルデンテ」という言葉を耳にしたことがあるかと思います。このイタリア語「アルデンテ」は「歯ごたえのある」という意味です。パスタ料理の第一歩はパスタをアルデンテにゆでることです。パスタをアルデンテにゆでるためにまず必要なことは、「豊富なお湯」「塩加減」「ゆで加減」です。

特に「ゆで加減」は重要で、よく言われるのが「指定時間の1分前で止める」ということですが、茹で上げはお湯の量や塩加減、火力、更には「水質（硬質とか軟質とか）」までもが影響します。「ポイルオーバー（ゆですぎ）」にならないためには、時間を計ることと同時に、実際のゆで加減を確認しながらゆでることが大切です。また、アルデンテのためには、パスタのゆであがりソースの出来上がりを一致させることが大切です。

そしてパスタ料理の調味料といえば、これは「オリーブオイル」です。オリーブオイルは秋に収穫されるオリーブの実を絞りとった油で、イタリアではサラダドレッシングをはじめ、炒め物、揚げ物、お菓子など、日本でのサラダ油感覚で幅広く使われています。本場イタリアではこのオリーブオイルを「オリーブ法」により3種類に分類しています。

バージンオリーブオイル ~ いっさいの化学的処理を加えず、搾ったままの状態で使用される油で、オリーブオイルの「一番搾り」的な存在。このうち、質のよいものが「エクストラバージン」とされます。

エクストラバージンオイル ~ バージンオリーブオイルの中で、酸価が1%以下の品質のよいもので、当然価格も高い。オリーブオイルが黄金色なのに対し、エクストラバージンの色は少し緑がかった色で、独特の深い香りと強いこくがあるため、料理の仕上げや香りつけに、そのままふりかけることが多いようです。

オリーブオイル ~ オリーブの実から搾り取った油のうち、酸価が高いものを精製し、バージンオイルとブレンドした油。イタリアでは一般的な油として多くの料理に用いられますが、独自の製法や香り付けなどのものが存在し、その種類は多岐にわたります。色はどれも美しい黄金色で、最近はエクストラバージンのもつ独特の香りを押え込んだオリーブオイルも多く見られるようになってきました。

パスタ通の人達に言わせると、「最も簡単で、最も難しいパスタ料理」とまで言われるのが「ペペロンチーノ」。にんにく風味のガーリックオイルと赤唐辛子でスパゲッティを和えただけの、とってもシンプルなスパゲッティは、そのシンプルさゆえに難しいと言われる。美味しさの決め手は「あつあつ」を食べること。ちなみに、ペペロンチーノは、イタリア語で「赤唐辛子」のことです。「にんにく」「赤唐辛子」「塩」「パセリ」「オリーブオイル」だけが「使用できる調味料」とされていますが、隠し味にアンチョビソースを入れてみたり、ハーブを振ってみたりしても、良いように思います。飲み物は冷たく冷やした辛口の白ワインやミントティーなんてお洒落でいいですね。コンサートの後のお食事に是非どうぞ。

